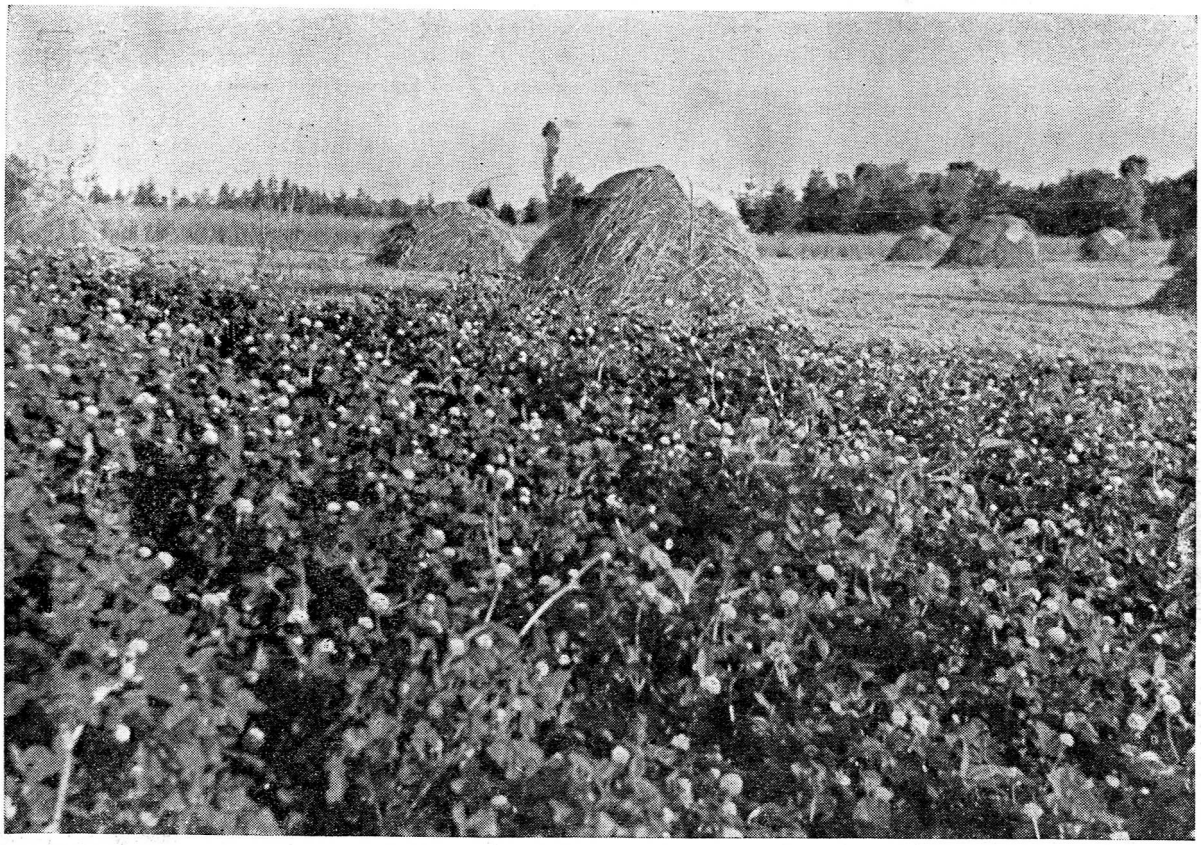

見事に生育したクロバーと收穫されたチモシー

家畜の好むもの

牛も馬も羊も一番好むものは美味な牧草である。われわれ日本人が米の飯を好むように草食動物は草を好む。年中、春の若草の如く伸びつづけるものなら、牧草だけで家畜は満足するかも知れないが、夏枯れもあり、うらぶれの秋もあり、また、長い冬もあるので、わが国の現状では、青草だけでは、完全に家畜を養うことができない。それ故に乾草をつくつて冬に備えたり、サンマーサイレージと称し、夏枯れ時に与えるサイレージを用意する。また、乳牛は毎日大量の牛乳を生産するために、水分が必要であるから、冬の乾草に添えて、家畜ビート、カブ、ルタバガ等の根菜やらキャベツのように水分を沢山含むものと、玉蜀黍のサイレージを給与するのが常法である。

さて、昭和二十八年は九州の豪雨禍から始まり、紀州地方の水害、京都府の水禍、十三号颱風による北陸地方、その他広範囲な被害があり、最後は北海道、東北、関東までも冷害を受けて米作は著しく減産し、蔬菜も果樹類も大なる被害を蒙つた。しかし、幸に牛乳の生産、即ち酪農の進展は一段と活況を呈し、牧草や飼料作物を重視するに至つたことは欣ばしいことである。

今やわが国は、米麦の不足が人口問題や経済問題の悩みのもとであり、これを解決する道は欧米諸国の如く、草を家畜に与えて乳、肉、卵を大量に摂取する以外にないのである。から、酪農に志す同志は、国家と国民の発展を希う同志は、昭和二十九年の年頭に当り、過ぎ来し酪農経営の内容を検討し、穀作農業の弱点を探究して、草の研究、酪農の研究に邁進したいものである。

日本の国土は、稚内港から鹿児島湾までの間、南北に長く、気候風土が非常に異なり、寒地から暖地まで、山あり、谷あり、河川あり、火山灰土、泥炭土、沖積土あり、酸性土、重粘土、砂土、礫土等区々さまざまであるから、それぞれに適する草種を選ぶことが必要となるが、広く世界各国に分布している牧草を見るときに、ルーサン(アルファルファー)は最良質の牧草であつて、過去の草生、草質改善の過程をみても、最後はルーサンに落ちつくのが一致した傾向である。わが国では最近高度集約酪農地帯の設定等の言葉を耳にするが、ルーサンの如きは比較的肥沃な土地に集約的に栽培すれば、極めて顕著な効用を発揮する牧草である。ルーサンはビタミン含量から見ても、蛋白、カルシウムの含量等から見ても、各種家畜を通じて最高の自給飼料であるから、積極的に栽培の研究をされることをお奨めしたい。

次に荳科牧草では、ラデノクロバーは、全国的に永年性の牧草として最適であり、湿地用にはアルサイククロバーを、一年生クロバ、としてはクリムソンクロバーが好適であるが、最も一般的である赤クロバーについては、更に普及徹底を望むことは勿論である。

禾本科牧草では北海道、東北地方はチモシーとオーチャード、関東以南のオーチャードの優秀なるは一般の認めるところであるが、最近の試作の成績から見ると、ケンタッキーブリュウグラス、ブロームグラス、トールオートグラス等、栽培利用の方法によつては決して前二者に劣るものではない。播種後一、二年の生産量と品質の点において、ケンタッキーブリューやブロームは、はるかに勝る場合もある。

暖地において五、六回以上連続刈取り大量の生産をあげるものには、スーダングラス、パールミレッド、燕麦とベッチの混播、大葉つる豆の利用等は刮目に価するものであり、瘠地の利用、冬季間の青草用としてのケンタッキー31フェスクの如きは、正に奇蹟草の名に相応しいもので、この強健性と冬季の繁茂性とを、惜しみなく活用すべきである。

また、牛肉と馬鈴薯という小説もあつたが、牛乳と根菜はまた冬季においては離し得ないものであるから、寒地においては日量十貫くらいを給与するよう生産計画をたて、暖地でも水田裏作等に作付して、毎日数貫くらい与えるようしたいものである。